

結婚と愛

結婚と愛についての一般の考えは、それが同義語で、同じ動機と同じ人間の必要性から生まれていることでしょう。そして他の一般の考えもそうですが、事実からではなく、迷信に依っています。

結婚と愛は共有するものが何もない。両極のように離れ、お互いに敵対するのです。むろん、ある結婚は愛の結果かも知れない。けど愛が結婚において自己肯定するからではなく、因習を乗り越えた人が僅んどいいだけの話です。今日の多くの男女にとって、結婚は道化芝居に他ならないのに、それに屈するのは、全く世論によるのです。兎角ある結婚が愛に基づくのは真実だとして、別の場合では、愛が結婚生活の中でつづくのも同じく真実です。そこでわたしは、愛は結婚と関係がなく、またそのために存在するのではないという意見です。

これに対して、愛が結婚の結果だとするのは、全くの嘘です。極くまれな場合だと、結婚した夫婦が結婚後、愛しあったなどという奇蹟を耳にしますが、詳細に見てみると、それは必然性への単なる適応に過ぎない。確かに、お互いの慣れあいこそ、愛の自発性、強さ、美しさから離れたものではなく、またそうしたものがなければ、結婚による親しみは、両性にとって墮落を示すものに違いない。

結婚は基本的には経済的妥協、保険契約です。それが普通の生命保険契約と異るのは、一層拘束的で強要することぐらいでしょう。しかも報酬は投資に比べ少い。保険証書を取戻すのでしたら、見会

った金を支払うとか、払いを続けるかどうかはいつでも任意です。しかし、もし女性の保険掛金が夫であれば、彼女は自分の氏名とプライバシーと自尊心、時には生命さえ、へ死が兩人を分離すまで、かけつづければならない。その上、この結婚保険は、彼女を生涯に亘る依存と寄食生活、個人的にも社会的にも全く無用なものにしてしまうのです。男性だってしよば代は払うでしょ。でも活動分野が広く、結婚は女性の場合ほど彼を制限しない。男は経済的な意味で鎖づけられたのを感じるのです。そこでダンテが地獄の扉にみた言葉は、結婚にも等しく強力に適用されるのです。

へこより入る者は

すべての希望を捨てよ

結婚は極く愚かな人以外、誰も否定できない失敗です。一瞥しただけで、離婚統計は失敗した結婚が、実際にどれほど厳しいものか示している。お定まりの俗物は、それを離婚法の乱用とか、女性のだらしなさに帰すのですが事実の説明になりません。先ず第一に、十二例のうち一例は離婚に終る。

第二に、一八七〇年以来、離婚は人口一〇万当り二八例から七三例に増えている。第三に、姦通は一八六七年以来、離婚の根拠として、二七〇・八%増加している。第四に、遺棄が三六九・八%増していることです。

かような驚くべき数字の他に、この主題を説明する多くの材料、劇的で文芸的な材料がある。ロバート・ヘリックは「一緒」で、ピネロは「Mid-Channel」ユージェン・ウオルターは、「支払完了」の中で、その他大勢の作家達は調和と理解の要因として、結婚が不毛であり、退屈で不潔、そして不十分なのを語っています。

考え深い社会学の研究者なら、この現象の表面的な言訳けにとまらないうでしょう。彼は両性の生

活の中を深く探究して、なぜ結婚が災厄を示すのか調べるでしょう。

エドワード・カーペンターはすべての結婚の背後に、両性の長い生活環境がある。お互いに異った環境のため、男女はいつでも他人だ。その上、迷信、慣習、くせ等の越え難い壁で距てられている。結婚がお互いの知識を啓発し、尊敬しあう能力を失えば、その結合は失敗に帰する、と言っています。

社会学的みせかけを嫌ったイブセンは多分、この真理を自覚した最初の人でした。ノラ（『人形の家の女主人公』訳註）は夫を離れる。―愚かな批評家が言うようにではない―なぜなら彼女は、自分の責任に疲れ果たとか、女性の権利の必要を感じたからではないのです。八年間自分が他人と生活して、彼に子供を生んでやったのだと知るに至ったからなのです。他人同志の間で近親性を生涯もちつづけなければならぬということ程、侮辱的で自堕落なものはないでしょう。女の知るべき事は彼の収入の他は必要じゃない。それなら女について知ることといえば、彼女がどんな好ましい容姿をしているか、の外は必要じゃないのでしょうか？わたし達は、女といえば魂がなく、男の付属品で、自分の影に怯える男性の都合のため、そのあばら骨から作られたのだとする神学的神話から、未だに抜けきっていないのです。

多分、女の劣等性は、彼女を作った素材の悪さに責任がある。いづれにせよ、女は魂を持っていない。それでは何によって彼女だと判るのでしょうか？その他、女が魂を持つのが少ければ少い程、彼女は妻として主張でき、夫の中に容易に没入できるでしょう。男性の優越性に対するこの黙従こそ、長い間、見せかけだけは手つかずの結婚制度を保存してきたのです。現在、女は自分になろうとしている。彼女は主人の恩恵の外で自立する程成長して居、結婚の神聖な制度は、序々に堀り崩され、やがてどんな感傷的歎きだつてそれはとゞめ得ないでしょう。

幼児の頃から、平均的少女は、結婚が最終目標だと教えられます。だから彼女の訓練と教育は、その目的に宛てて行われる。屠殺用のかせをはめたもの言わぬ獣のように、女はその準備をする。それどころか、奇妙に聞えても、女は普通の仕事師が仕事についての知識をもっている程には、妻として母としての働きの知識は授けられない。上品な娘が夫婦関係について何か知ろうとするのは、下品で不潔だとされます。まあなんと上品さは、定めのないものでしょう！人は結婚によって不潔な何かを、誰も敢て質問したり、批判しようとしないう、純粹で神聖な取決めだと誓約させたがるのです。それこそ、平均的結婚支持者の常套的態度なのだ。未来の妻であり、母である彼女にとって、競争市場での唯一貴重な宝、性については全くの無知に付されているのです。かくて女性には、生涯に亘る男との関係に入り、ショックを受け、極く自然で健全な本能―性により計り知れない程の厭悪と凌辱にさらされるのです。結婚生活のもたらす不幸、悲哀、苦悩そして肉体的悩みの大部分は、美德として賞揚されるべき性についての犯罪的な無知によると言えましょう。多くの家庭が、この恐るべき事実によって崩れると言っても、決してわたしは言い過ぎていません。

しかし、もし女が国家とか教会の聖化を待たずに、性の神秘を学ぶ程、十分自由に成長できたら、空っぽの頭と金があるだけにとりえの「善良な」男の妻になるのは、全く不相応だとするのにも堪えられるでしょう。健康で成熟した、生命力と情熱の溢れる女にとって、自然の要求は否定しなければならぬ、自分の強烈な熱望は抑えるべきだ、健康を傷つけ、精神を損い、夢は阻害され、例の「善良な」男性が出現して、妻として受入れて呉れる迄、性経験の濃さと欲びは控えていなければならぬ、いとする考えぐらい、不道徳なものが他にあるでしょうか？それこそ結婚の意味する内実なのです。どうしてさような取決めが失敗しない筈があるのでしょうか？そしてまたこれは、結婚に附随する少

らず重要な要因であつて、愛と異なるものなのです。

わたし達の時代は実務の時代です。ロメオとジュリエットが、愛の故で両親を怒らせたとか、グレッツェンが愛の故で近隣の噂になつたとかというのは最早少い。極くまれに、若い二人は豪華なロマンスが許されるが、それも年長者の世話になり、訓練を受け破砕されて、ご両人はへもの判りがよくなるようにされます。

少女に教へこむ道徳教育は、男が彼女の愛を掻きたてることではなく、〈お幾ら?〉というのです。それが米国人の実務生活の重要な唯一神です。あの人は生活できますか? 妻を養えますか? それが結婚を正当化する理由です。これが少女のすべての考えにしみこむと、彼女の夢は月の光や接吻でなくなり、笑いや涙ではなくなる。ショッピングとバーゲンでしかなくなる。かような魂の貧弱さとあさましい欲望こそ、結婚制度にしみついた要素なのです。国家と教会が他ならぬ結婚を偶像視するのは、国家と教会による男女の管理に必須のものだからです。

むろん、世の中には愛を金銭以上だと考える人がいます。特にこの傾向は、経済上の必要によつて自立を強いられている階級です。女性の地位の重大な変化は、強力な経済要因によつてもたらされたのですが、女性が産業界に入つてまだ間がないのを想うと、容易ならぬ現象です。六〇〇万の女性賃金労働者、六〇〇万の女性が男性と等しく搾取され、奪われストに入るのです。そうです。飢えさせるのです。これ以上に何かございますか、旦那様? そうです。六〇〇万の女性賃金労働者が人生のあらゆる分野で、高級な頭脳労働から炭鉱の苦勞な酷い仕事、鉄道トラック運輸まで、いいえ刑事や警官にまでなつてゐるのです。女性解放もここまでくれば完璧でしょう。

それだけでなく、巨大な女性賃金労働者軍のうち、男性と同じく仕事を一生の給与とみる人は極く

少い。男はどれ程老衰しても、独立して身を養うよう教へられます。そうです。本当は誰ひとりとして、わが経済の踏み車に関係して独立などありはしない。それでも貧者のサンプルのような男でも、寄食生活は嫌う。兎角そう見られるのは厭がるのです。

女性は自分の地位を、最初の入札者が来次第、手放す臨時雇いだと思はしている。それが男性より組織化のむづかしい理由です。「なぜわたしは労組に入らなければならない? 結婚して家庭をもつんだわ」女性は幼児期から、それこそ究極の聖職だと教へられているのではないですか? 家庭は工場程大きい刑務所ではないにしても、より嚴重なドアと格子が嵌めてあるのが判るでしょう。その管理人は何も見通さないので。ただ最も悲哀な役割は、家庭が女性を賃金奴隷の身分から自由にするどころか、その上に仕事を加えることです。

〈労働、賃金、及び人口密集についての〉委員会に付託された最新の統計によると、ニューヨークの賃金労働者の十%が結婚して居、しかもその女性達は、世界でも最悪の低賃金で働かねばならないのです。家事の骨折りに加へ、家庭の保護とか光栄が女性に与えられてゐるのでしょうか。実際、結婚した中産階級の娘は、自分の家庭と呼び慣らすけど、彼女の領域を作つてやつたのは男性なのです。主人が野獣だろうとダーリンだろうと問題じゃない。わたしはつきりさせたいのは、結婚が女性に保証する家庭とは、ご亭主のお情けにすがつてゐるということです。彼女は彼の家庭を年から年中、動き廻り、自分の人生と人間らしい事情が平凡で狭くて、周囲と同じぐらいさえなくなるのです。彼女が絶えず小言をいい、ちつぽけで怒りっぽく、噂好きで我慢がならなく、男が家に居着かなくなるのは無理ありません。それでも女は例え望んでも出て行けない。行き場がないのだ。その上、結婚生活の短い期間で、能力のすべてを吐きだしてしまひ、普通の女性は外界に全く適応力を失つてし

まう。外見をかまわず、動きは鈍り、とり決めも依存して、判断は憶劫、大方の男が嫌って軽侮する程、身重でうんざりになるのです。人生を我慢するのになんと啓示的な光景でしょう？

でも子供は、結婚しなくてどうやって保護するの？結局、それが最重要な気懸りじゃあない？嘘と偽善のかたまりよ！結婚が子供を保護する。それでも何千人もの子供達が貧しく家なし児です。結婚が子供を保護する。それでも孤児院と感化院は満員で、児童虐待防止協会は、小さな犠牲者を「愛する」両親から救出して、もっと愛の世話をする（楽しい協会）の保護の下に置くのに忙がしいのです。それを嘲笑するのですか？

結婚は（馬を水際まで連れてくる）力はあるけど、水を飲ませ得たでしょうか？法律は父親を逮捕して、囚人服を着させはするが、それで子供の飢えを鎮めたでしょうか？もし親に職がないとか身分を秘すなら、結婚に何ができるでしょう？法律はその男に「正義」をもたらし、彼を安全に閉じこめるけど、その男の労働の報酬は子供に届かず、国庫に納まるのです。子供には父親の囚人服のいやな記憶が残りません。

女性を保護する——そこに結婚の呪いがある。それは本当に女性を保護するのではなく、まさしくその理念が、人生にとって厭な無法の侮辱的なもので、人間の尊厳を損い、永遠にこの種の寄食的制度を不可と宣告させるのです。

それはまた家長的配置——資本主義に似ている。男性から出生権を奪い、彼の生長を阻害し、肉体を毒素に漬け、無知と貧乏と依存に付し、遂には人間の自尊心の最後の痕跡に喰いこむ慈善事業を設置するのです。

結婚制度は、女性に寄食生活、絶対的依存をさせるものである。それは女性から人生の闘争を奪い、

社会的良心を無化し、想像力を枯渇させ、それから情け深い保護を与えるが、実のところそれはわなで人間の性格を茶化すものです。

母親は女性の本質の最高の完成である。愛と自由を別にして、他にどんな保護が必要だろうか？結婚はその完成を駄目にし、乱暴して墮落させる。それは丁度、女性に向って、君がついて来れば、新しい生命をあげよう、と言うのです。女性が身を売らなければ、母性権が買えないのなら、女性を木石と考え、卑しめ辱かしめることではないですか？もしそうなら結婚は、母性になる為、たとえ憎悪と強制のもとで作られても、それだけのため認められることにならないでしょうか？けど母性は、愛や恍惚の、飾り気のない情熱の自由選択によるものです。それなのに世間では、無罪の人の頭上にいばらの冠をのせ、恐るべき文字（私生児）の銘を血の文字で刻みこむのです。もし結婚に、求められるすべての美德が含まれているなら、母性に対する結婚の犯罪は、愛の領域から永遠に除外されるべきです。

愛は人生で最強、最深の要素であり、希望と歓び、恍惚の先づき。愛はすべての法律、すべての慣習の挑戦者。愛は自由で人間の運命の強力な建設者。もしそうなら、さような抗いがたい力がどうして国家や教会で生まれる貧弱な喪章と同義語になるのでしょうか？

自由恋愛／愛が自由に外の何かであるような口振ります。男は頭脳は買えましょう、でも世界中の何百万人もの人びとは、愛を買うことはできないのです。男は肉体を屈服させるでしょう。でも地上の全権力だって、愛を屈服させはしません。男は諸国を征服するでしょう。でも全軍隊をもつてしても愛は征服できない。男が精神に鎖をつけ、かせをはめるでしょう、でも愛の前には無力です。玉座に就き、どれ程の輝きと尊大さを男の黄金で支配しても、愛が声をかけなければ、彼は貧しく哀れ

れです。もし愛が留まれば、極貧の廃屋でも、生命と色づきで温かく輝きます。かように愛は乞食を王様にする魔力を持っている。そうです。愛は自由だ。愛はそれ以外の雰囲気には住みつけないのです。自由の中で、愛は恐れ気なく、豊かに完成します。一度、愛が根づく、どんな法令や世の中の法廷だって、その土壌から取去ることはできないのです。でも土壌が不毛だったら、結婚で実を結ばせることができるだろうか？それこそ、生命を死から遁がれさせようとする絶望的な闘争に似ているのです。

愛に保護は必要じゃない。それ自身で防衛します。愛が生命をもちつづける限り、子供を遺棄したり、飢えさせたり、愛情の欠乏で飢死させはしない。わたしはこれが本当だと思う。自分の愛する男性によって、自由の中で母親になった女性を、わたしは知っています。

権威の守護者は自由な母性に敵対する。獲物が奪われると思うからです。誰が戦争にでるのか？誰が富を作るのか？女が無分別に子供の養育を拒否したら、警察官や看守に誰がなるのか？民族はどうなる？王様と大統領と資本家と司祭が言います。例えば女が子を産む機械になっても民族は確保しなければならぬ。そこで結婚制度が女性の恐るべき性的自覚の安全弁になったのです。でもこうした拘束状態を維持するための狂気じみた努力は無駄でしょう。教会の布令、支配者の攻撃、例え法律の腕をもつても無駄です。女性是最早、病的で弱々しい、老衰したみじめな人間、貧乏と隷属のくびきを払いのける力も道徳的勇氣もない人間の生産には、加担したくないのです。女性が希望するのは、愛の中で産み育てられる、自分の自由選択を経た、結婚が押しつける強制によらない、僅かなよりよい子供達なのだ。偽善的道德家達は、女性の胸の中で眼覚めた自由な愛、その子供に対する深い責任感を知る必要がある。破壊と死だけが呼吸する環境の中で生命をもたすらすらいなら、母性の光栄を

永久になくしたいのです。もし母親になったら、自分のできる深い最良のものを、その子に与えたいのです。子供と共に生きること。それが彼女の標語です。そうした仕方だけが、本当の男らしさや女らしさを造りあげる助けになるのをよく知っているのです。

イブセンがアルヴィング夫人で形象化した時、彼は自由な母親のヴィジョンを持っていました。彼女は結婚とそれの持っている恐怖を克服して成長した故に理想の母親でした。なぜなら、自分の鎖を断ち切り、自分の精神が自由に飛翔して、個性を回復し強力になったからです。でも彼女の大切なオスワルド、生命の歓びを救うには遅すぎたけど、美しい生活の唯一の条件である自由の中に愛を実現するのは遅すぎなかった。アルヴィング夫人のような女性達は魂の覚醒を血と涙で買い、結婚が詐欺で浅はかで空虚なお笑い草なのだと非難しています。彼女達は愛こそ、それが短い期間であろうと永遠であろうと、新しい種族及び新世界を創造し、鼓吹し、引きあげる基礎になるのを知っているのです。

現在の小人国では、愛は多くの人にとって未知なものです。誤解といつわりで、減多に根づかない。またはすぐ枯死してしまうのです。その繊細な組成は日常性のストレスと緊張に耐えない。その魂は、わたしたちの社会的構成の貧弱な下地に適応できないのです。愛は、それを必要とする人びとと共に歎き悲しみ、苦悩していて、愛の至上に昇化する能力を失ってしまったのだ。

いつの日か、いつの日か男と女が起ちあがり、その山頂へ到達するでしょう。彼等は愛の金色の光に浴して、大らかに力強く自由で、お互いに受入れ、参加するでしょう。男と女の生命の中にそうした力が隠されているのを、どんな空想が、想像力が、そしてまた詩的天才が描きだすのでしょうか。この世界がいつでも、本当の友愛と結合を産みだすのだとすれば、愛はその親になるべきです。

経験こそ最良の学校だと考えられるようになった。その学校で何か大切な教課を学ばない男女は、当然低能とみなされるのです。可笑なことを言うようだが、組織化された教育機関は過誤をひろめ、経験から何も学ぼうとしないのに、わたし達はそれを当然だと黙認しているのです。

バルセローナに住み、働いている人に、フランシスコ・フェラーがいる。子供達の教師で、人びとによく知られ、敬愛されています。スペインの外では、フランシスコ・フェラーの仕事は僅かな知識人しか知らない。広い世界ではあるかなしかの存在です。

一九〇九年九月一日、スペイン政府は「カトリック教会の命令でフランシスコ・フェラーを逮捕した。一〇月一三日、宗教裁判の後、彼はモントジユイチ刑務所の溝に連れて行かれ、恐ろしい嘆きの壁を背にして、銃殺されたのでした。名もない教師フェラーはその瞬間から、世界的に注目を受ける人となり、気ままな殺人者に向け文明社会の抗議と憤激が燃えさかったのでした。

フランシスコフェラーの殺害は、スペイン政府とカトリック教会が犯した最初の犯罪ではないのです。あの諸制度の歴史は、火と血の長い流れである。それだのにあの人びとは、経験から学びとらず、未だに教会と国家によって惨殺された弱い人間が、力強い巨人となり、いつの日か人類を恐るべき牢獄から解放するだろうことを自覚しないのです。

フランシスコ・フェラーは一八五九年、貧しい両親の間に生まれた。両親はカトリック教徒だったから、息子も同じ信仰に育つよう願ったのでした。その少年が偉大な真理の先駆者になり、その心が旧態の道を辿るのを拒絶するとは考えてもみなかったのです。早くからフェラーは公共の信仰を問題にしはじめました。彼は、善良さと愛を語る神がどういう訳で、純真な子供の眠りを、仕置きの苦痛や恐怖、地獄の苦しみで悩ませるのが、知りたいと訊ねたものです。明敏で活きいきとした彼の探求心は、カトリック教会―黒い怪獣の醜い正体を見破るのに時間はかかりませんでした。彼は信仰を持てなかつたのです。

フランシスコ・フェラーは疑問をもつ人、真理の探求者であつただけでなく、反抗者でした。彼の魂は自国の鉄の体制に正しく反発し、反抗者の一団が、勇猛な愛国者、ウイラキヤンパー將軍に率いられ、共和主義の理想の旗の下で、体制に猛攻をかけた時、この若いフランシスコ・フェラー程、勇敢な戦闘者は他にいなかったものでした。共和主義の理想——わたしはその理想とこの国（米國）の共和主義を混同しないように希望する。アナキストとしてのわたしは、ラテン諸國の共和主義者にどんな異議を持つてゐるにしろ、彼等の方が、米國において自由と正義のあらゆる痕跡を破壊しつつある腐敗反動の共和政より、はるかに聳立してゐるのを知つてゐます。マツジニーやガルバルディの徒を考えただけでも、それからその他の一群の人達でも、力を尽したのは専制主義を倒すだけでなく、特にカトリック教会が、その発端からあらゆる進歩と自由主義の敵だと自覺してゐたのです。

米国では丁度この逆です。共和主義は、帝国主義、汚職、自由のあらゆるみせかけの破滅に対する既得権なのです。その理想は、マツキンレイのような人の口先だけのむずむずするような世間体だとか、ルーズベルトのような人の粗野な敵意なのです。

スペインの共和主義の反抗者達は鎮圧された。時代の岩を砕き、カトリック教会とスペインの王座のヒドラ(恐怖・復讐の女神―訳註)の首を切り落すには更に勇猛な尽力が必要でした。逮捕、迫害、処罰がこの小さな手の英雄的な企図を追ってきました。血に飢えた犬共から遁れた人びとは、外国へ逃亡しなければならなかったのです。フランシスコ・フェラーもそこに含まれ、彼はフランスへ行きました。

どれ程、彼の魂がその新天地で開花したことでしょう。フランス、自由と理念と行動のようらの地。豊かなバリ、すべての若者にとって、バリはその願えおのく生活によって、遅れた自由の暗がりからでてきた彼に、どんな息吹きを伝えたのでしょうか。若い理想主義者にとって、これは栄光の機会だったのです。

フェラーは時を失わなかった。飢えた者のようにあらゆる自由運動に身を投じ、色いろな人びとと逢い、学び吸収して生長しました。彼地で彼は、近代学校が運営されているのを見たのです。それが彼の生涯に重要で決定的な役割を果たすことになりました。

フランスでは、近代学校はフェラーの時代よりずっと前に設置されていました。規模は小さくともその推進者はやさしい心の持主、ルイズ・ミッシェルでした。意識的か無意識的にか判りませんが、わが偉大なルイズは、以前から未来は若い世代のものだ。若者が心情と魂を破壊する制度から救われない限り、ブルジョワの学校、社会悪は存続すると感じていたのです。多分彼女はイブセンと共に、あたりは幽霊が充滿し、男も女も多くの迷信を克服しなければ、どうにもならないと考えていたのでしょう。人は一つの幽霊の死のあざとから遁れると、見よノ九九の別な幽霊のくびきにつながれているのが判るものです。こうして完全な復活の山頂にたどりつく人は僅かしかいません。

しかし子供は克服すべき遺伝がありません。その知性は、きまった思想で負担をかけられていず、その心情は階級や身分制で冷やかになっていない。教師にとっての子供は、陶芸家にとっての泥の關係です。世の中がそれを芸術品とするか出来の悪い模造品と受取るかは、大部分、教師の創造力に依存しているのです。

ルイズ・ミッシェルは子供の魂を刻り込むにふさわしい先天的才能をもっていました。彼女自身が子供のような性質で、新鮮でやさしく、汚れないおとなしい人であったのではないのでしょうか？ルイズの魂は、いつでも社会的不正義に対しては、白熱して燃えさかったものです。彼女は、パリ市民が何かの悪に反抗する際は、いつでも最前列に間違いなくいました。ですから被抑圧者に捧げたことで、投獄の苦しみを受けたのですが、モンマルトンにあった小さな学校もすぐなくなってしまうのです。だが種子はまかれ、フランスの多くの都市で果実を結びました。

近代学校の最大の試みは、いつまでも若い老年のポール・ロビンによってなされました。幾人かの友人と一緒に、彼はバリの近郊、セムパスに大きな学校を創設したのです。ポール・ロビンは教育における近代思想を越える高い理想をねらいました。彼は事実によって、遺伝についてのブルジョワ的觀念が、若者のさらされている恐るべき犯罪から、社会は無罪だとする口実に使われているのを証明しようと思ったのです。子供は父親の罪を被らなければならない、それだから貧乏と汚れがなくてはならない、その子が酒飲みになり犯罪者になるのは、それ以外に何の遺産も残せない故だと主張すること程、ポール・ロビンの美しい精神にとって、堪えがたい不合理はなかったのです。彼は、遺伝がどれだけの役割をしようとして、その他の要因も同じく重大だ、それこそいわれている第一の原因を除去するとか、最小限にとどめるものだと思っていました。適度の経済的社会的環境、自然の息吹と自由、

健康な運動、愛と同情、何よりもまして子供が必要とするものについての深い理解——かようなものが、純真な若者達の蒙っている残酷、不正、そして犯罪的な恥辱を破砕するのです。

ポール・ロビンは、子供を選ばなかった。彼は、所謂、最良の両親達は訪ねませんでした。どこでも素材を得たのです。街路で、穴倉から、孤児や捨て児の収容所から、感化院から、情け深い社会が自己の罪意識をなだめるために、その犠牲者を隠している灰色の厭わしい場所から連れてきました。彼は汚れてきたない、ふるえている浮浪児達を、収容できる限り、セムパスへ集めました。そこは自然の輝やかしく、自由で放縦な環境に囲繞され、良い食事と清潔さが保たれ、深い愛と理解を受けて、小さな人間植物は、育ち花咲き発展したのですが、その生長よりは、彼等の友人であり、教師であつたポール・ロビンの期待をはるかに越えたものでした。

子供達は、自立でき、自由を愛好する男女に育つたのです。貧乏人が貧乏人でありつづけるようにする制度にとつて、これ程危険なものがあるでしょうか？セムパスは、フランスで禁止されている共学の罪科で、フランス政府により閉鎖されました。しかしセムパスは、すべての進歩的教育家に、巨大な可能性と近代的教育法にとつての刺激になるには十分なだけ運営されたのです。それこそ、ゆつくりではあるがしかし確実な現体制の掘り崩しになるのです。

セムパスの後から、一群の教育上の試みがつづきました。その中に豊かな才能をもつた作家・詩人で、《自由恋愛》の著者であるマドレーヌ・ヴェルネと《蜂の巣》学園のセバスチアン・フォールがいます。そこはわたしが一九〇七年、パリ滞在中に訪ねました。

数年前、同志フォールは土地を購入して、彼の《蜂の巣》学園を建設したのです。比較的短期間に、それまでの荒地を、手入れの行き届いた農場風の花咲ける地に変えることに成功しました。三つの建

物で囲まれた大きい四角な前庭、それから広い路が野菜畑と果実園へ続き、訪問者の眼を迎えるのでした。その野菜畑はフランス人だけが知っている仕方で管理され、この《蜂の巣》学園に色とりどりの野菜を供給していました。

セバスチアン・フォールの意見は、もし子供が矛盾した影響の下に付されると、子供の発展は阻害されると言うのです。物質的必要性、家庭的衛生、知的環境が調和しているだけでも、子供は健康で自由な人に育ちます。学園に関連して、セバスチアン・フォールはこう言っている。

「私は男女廿四名の子供達、大方が孤児だとか、費用の払えない両親の子供を受入れている。その子達の衣服と宿泊と教育を自弁しているのだ。子供は一二才になる迄に健全な初等教育を受ける。一二才から一五才迄に——学習は続けているが——何かの職業を、子供の個人的な傾向と能力に応じて教授する。その後、《蜂の巣》学園を去つて外界へ出るのは自由だが、学園はいつでも両親が愛児を迎えるように、両腕を拡げて歓迎する。ところでもし彼等が、この土地で働くのを希望するなら、次ぎの条件がある。所得の半は彼または彼女の生活費とする。別の半は新入児の受入れに宛てた費用として基金に当てる。残り半が適当と認められるその子の個人的利用に供されるのだ」

「私が現在、面倒をみている子供達の健康は良好だ。清浄な空気、栄養のある食物、戸外での肉体的運動、散歩、衛生規則を守ること、短く興味深い教授法、とりわけ子供達に対する私達の理解と気遣い等が、素晴らしい肉体的心理的成果をもたらししている」

「私の生徒達が驚異を達成したと主張するのは正しくない。だが彼等が平均的人間に属するのを考慮すれば、そして以前は機会がなかったのだから、この成果は真に感謝すべきものである。彼等が習得したもののうち最重要なものは、普通の生徒にはまれな、勉強の愛好、知りたがる欲望、それに教え

て貰いたがる特徴である。彼等は新勉強法、記憶を速め、想像力を刺激する方法を学んでいる。私達は子供の興味をその環境に眼めさせ、観察、研究、反省の重要さを自覚させている。それ故、大人になっても自分の周囲の事柄について盲目であつたりつんばであることはないだろう。私達の子供は、何故とかどういふ訳で：と訊ねないで、盲目的信念を受け入れるとか、自分達の疑問が完全に答えられないのにそれで満足するということはないのだ。そこで彼等の知力は、不完全とか真実でない答えによつて生まれる疑惑や恐怖からは自由である。こうしたものこそ子供の生長をさまたげ、自己や周囲の人びとに対する信頼を失わせるのだ」

「私の子供達がお互いの間でどんなに率直で、親切で愛情深いかは驚きである。《蜂の巣》学園において、子供達と大人の間にある調和は非常に勇氣づけられる。もし子供が、私達大人を年長だといふだけで怖わがつたりあがめたりするのであれば、間違っていると考えるべきだ。私達は彼等の信頼と愛情を得るためにはすべてをやっている。つまり義務の代りに完全で理解の行き届いた意志を、恐怖に代えて信頼を、そして嚴格の代りに愛情を：である」

「まだ誰も、子供の魂の中に隠されている共感、親切、優しさの富を十分に自覚した人はいない。真の教育家は、その財宝をとりだすようあらゆる努力を傾注すべきである。子供の衝動を刺激して、最良の高貴な憧憬^{どきけい}を呼びさますのである。人のライフワークとして、この人間植物が成長しその本性に従つて花びらを開き、本当の個性に發展するのを観察することほど、大きな褒賞があるだろうか。《蜂の巣》学園での私の同志達は、他に褒賞を望まなかった。私達の人間・花園が美しい果実を約束したのは、私自身よりも彼等と彼等の努力に負うのである。」

歴史の課題と古い教育法の流布に関して、セバスチアン・フォールは言っている。

「私達は子供に次ぎのように説明している。真の歴史は、これから書かれるものなのだ。より偉大な偉業を求めて、人類を助けようとする努力の過程で、無名のまゝ、死んだ人びとの物語である」

フランススコ・フェラーは、近代学校の大きな波を遁れ得なかつたのです。彼はその理論的形態だけでなく、日常の必要に応用可能なのをみてとつた。スペインが他のどの国よりも、司祭と軍人の二重のくびきをはねのけるには、実にかような学校が必要なのを、彼は認めなければならぬのでした。スペインにおける全教育は、カトリック教会の手中にあり、そのカトリックの公式がへ九才迄に、子供の心にカトリシズムをたゝき込まなければ、永遠に他の思想にとつて代えられると言ふのを考え合わせれば、民衆に新しい光を持ちこむフェラーの素晴らしい仕事は、理解できましよう。間もなく幸運が彼の立派な夢をかなえる手助けをしました。

フェラーの生徒だつたムーニエ嬢は、富豪のお嬢さんで、この近代学校の計画に興味を持った。彼女は死に臨んで、フェラーに相当な資産と学校宛に年間一万二千フランを遺贈したのです。

世に、卑しい人は卑しい考えしか浮ばないと言います。自己の黒い犯罪を正当化するため、フェラーの人格を悪しざまに言うカトリック教会の卑しい方法は、それで容易に納得できます。そういう訳で、米国のカトリック系新聞に、フェラーがムーニエ嬢と親交を結んだのは、彼女の資産をわがものにするためだつたと：嘘を流したのです。

個人的には、私はそれがどんな性質のものであれ、男と女の間の親交は、彼等自身の事件であつて、彼等にとつて神聖なものだとするのが私の考えです。だからこの問題については、フェラーの周辺に数多く流されている卑怯な嘘の一つにならない為にも、言葉を慎もうと思ふのです。むしろ、カトリックの司祭の純潔がどんなものか知っている人なら、このえん曲な言廻しがお判りでしょう。一体、

カトリック僧たちは、女を性的商品以上にみたことがあるでしょうか？修道院と僧院で発見された歴史的資料は、わたしにそう確信させるのです。もしそうなら、彼等は、性的基準以外に、男と女の協働が理解できるでしょうか？

事実、ムーニエ嬢は、フェラーより相当年上でした。幼女時代、少女時代を、りんしょくな父と従順な母の許で過ごした彼女は、幼年時代に愛と歓びの必要なことを容易にみでとることができたのです。彼女は、フランシスコ・フェラーが、大学出だとか、教育機械、免状で作られた先生ではなく、聖職にふさわしい天賦の才能をもった教師なのを知っていたのに違いありません。

知識、経験、それに必要な資産を身につけ、とりわけ自己の職務について聖火を吹きこまれたわが同志は、スペインに帰国して、自分のライフワークを開始しました。一九〇一年九月九日、最初の近代学校が開校したのです。バルセローナの民衆は熱烈に歓迎して、支持を誓ったのです。開校記念の短い演説の中で、彼の計画を友人に述べました。

「私は演説家、宣伝家、闘士ではない。教師です。何ものにもまして子供を愛する者です。私なら彼等を理解できると思う。私は、若い世代が、新時代に対応できるようになることが、自由運動における私の貢献であるよう望む」

彼は友人達から、カトリック教会に反対するのは用心するよう注意された。彼等は、教会が敵を取扱うのにどのくらい時をかけるかよく知っていたのだ。フェラーも知っていた。だがブランド（イブセン劇の主人公―訳註）のように、フェラーは一切か無であった。彼は近代学校を昔日の虚偽の上に建設しようとはしなかった。子供達に対して、率直で正直で明けつぽろげだった。

フランシスコ・フェラーは要注意人物であった。開校の初日から尾行された。学校の建物は監視さ

れ、マンガトにある彼の小さな住所も監視された。外出は追跡され、同僚との会議でフランスとか英国へ行ってもそうだった。彼は要注意人物なのだ。潜んだ敵がわなを締めるのは、それこそ時間の問題であった。

それは一九〇六年、フェラーをアルフォンソ（スペイン皇帝―訳註）の弑逆に連座させることに成功した。だが反証は黒いカラス共（カトリック司教達―原註）に対し強力だったから、釈放しなければならなくなった。しかし親切からではなかったのだ。彼等は待つことにした。そうなのです。犠牲者にわなをしかけるまで、待つことにしたのです。

遂に時は至った。それは一九〇九年七月、スペインでの反軍備運動の高揚でした。革命史の年譜の中で、反軍国主義に対するこれ程顕著な抗議をみつけるのはむづかしい。幾世紀に亘って、軍人に抑圧されていたスペインの民衆は、最早、そのくびきに耐えなかつたのです。彼等は無用な殺戮に参加するのを断わった。勇敢なりフ人達のような自己の独立を求めて戦う少数民族を、抑圧したり圧迫する専制政府は支援する理由がないとしたのです。絶対、武器を向けはしない。

八〇〇年間、カトリック教会は、平和の福音を説いた。だが民衆がその福音を生きた現実にしようと望めば、教会は当局を示唆して、武器を執るよう強制するのです。そうしてスペイン王朝は、ロシ

ア王朝の殺人法を踏襲し、民衆は戦場へ駆立てられるのです。その時、いやそれ以前だって、スペインの労働者達は、主人に―ヒルのように力を吸いあげ、生血さえ吸い尽す、主人に対し反抗したのです。そうです。彼等は教会と司祭を攻撃しました。例え司祭共が千個の生命を持っていたとしても、彼等がスペインの民衆に犯そうとしていた恐るべき暴虐と犯罪の代償は支払えなかつたでしょう。

一九〇九年九月一日、フェラーは逮捕された。一〇月一日まで、友人や同志は、彼がどうなったのかわりませんでした。その頃、ウマニティ紙(L'Humanité)が受取った手紙によって、裁判のまねごとの全貌が判明した。翌日、彼の知友ソルダート・ウイラフランカが次ぎの手紙を得ました。

「心配には及ばない。知つてのとおり、私は完全に無罪だ。今日は特に希望が持て、歓ばしい。君に便よりするのは初めてだし、私が独房の窓を通して、優さしく溢れる太陽の光を浴びるのも初めてなのだ」

フェラーが一〇月四日迄、死刑を宣告されたのを知らなかったとは悲しいことだ。もつと悲しいのは、彼の友人や同志達が、敵の正義感を信頼するという失態をしでかしたことです。幾度、司法当局に信頼をかけても、友人達が目前で殺されるのを見るだけだったのです。彼等はフェラーを救援するとか、抗議さえしなかったのです。へだつて、フェラーを死刑にするなんて無茶だよ。無実なものね、けどカトリック教会には一切が可能なんです。教会こそ、その敵に対して、裁判の茶番劇を施す実務家ではないでしょうか。

一〇月四日、フェラーは次の手紙をウマニティ紙に送りました。

「親愛なる友人諸君

完全な無実にもかかわらず、検事は、死刑を要求したのである。根拠としては、私が警察を誣告し、世界のアナキストの首領で、フランスの労組を指導したこと、また反逆及び各地の蜂起は有罪で、ロンドンとパリへ私が行ったのは、他ならぬその目的を達成するためだったと言うのです。

さような不名誉な嘘で私を殺そうとしている。

使いの者が出発するので時間が無い。警察が担当判事に提出した証拠は、すべて嘘と悪意で取り入れたものです。だが私には反証がなく、どうにもならない。」

一九〇九年一〇月一三日、あれほど勇敢で、堅固で、誠実だったフェラーの心臓が止った。不幸な人達、あの心臓の苦悶の鼓動が止んだ時、文明世界の人びとの心臓が百倍も高鳴ったのだ。それは恐るべき雷となり、黒い犯罪の扇動者共の上にその悪業を投げつけました。黒い衣服をつけ、信心深い顔付きの殺人者共を法廷に引きつり出せ！

フランシスコ・フェラーは反軍蜂起に参加していたのだろうか？最初の起訴状によれば、それはマドリッドのカトリック系新聞に、司教とバルセロナの聖職者達の署名したものでしたが、彼は参加によって告訴されてはいない。フランシスコ・フェラーを有罪としたのは、無神学校を組織し、無神論的文献を流布したとして起訴状が有効になっている。けど、廿世紀の世の中で、人をその無神論的信念の故をもって焼殺す訳にはいかない。何かを考案しなければ……そこで蜂起を扇動した罪が付加されたのです。

これ迄信頼できる筋を調査したところでは、フェラーを蜂起に結びつける証拠はみつからない。けど証拠は必要ではなく、当局も受入れはしない。七二名の証人がいるにはいるが、その証言は文書にしたものである。彼等はフェラーに接したことがなく、彼も彼等と接したことはないのです。

フェラーの参加は心理的に見て可能でしょうか？そうは思えない。わたしの理由はこうです。彼は偉大な教師であっただけでなく、また確しかに驚異的な組織者でした。一九〇一年〜一九〇九年の八間に、彼はスペインで、一〇九ヶ所の学校を創設し、他に一〇八ヶ所の学校に自分の地方の自由主

義的要素を導入させたのでした。また学校の仕事に関連して近代的印刷工場を設置し、翻訳スタッフを組織して、近代科学と社会学の書物を十五万部、しかも大量の合理主義者のテキストも洩れなく、広範に流したのでした。実に方法論をもった才能のある組織者でなければ、かような偉業を成す人はありますまい。

他方、反軍蜂起は少しも組織だったものではなかったのが証明されている。即ち、数多くの革命の高揚が、これまで幾度も機会あることに示したように、民衆自身にとって、それは思いがけずやってきたのです。例えば、バルセロナの民衆は四日間、全市を手中に納めた。そして旅行者の証言によれば、以前より立派な秩序と平和が保たれていたと言われている。むしろ、民衆はその時期が到来しても準備がなく、どうしていいか判りません。この点、彼等は一八七一年のコミューンに際してのバリの民衆と同じでした。バリの民衆達も無準備だった。あの人びとは飢えながら、食料の詰った倉庫を防備していたのです。彼等は、ブルジョワジーが盗んだ金を保管していたフランス銀行を警備するのには歩哨をたてたのです。バルセロナの労働者達も、主人共の獲物に見張りをつけたのです。

負け犬の愚かさとは何んと悲しいものでしょう。これ程の悲劇がありましようか！けどそれはくびきが人の肉深く喰い込み、たとえ破ることができたとしても、破れない程、固く締めつけているのに外ありません。権威、法律、私有財産への畏怖が、人の魂に鋭く焼込まれているのです。ではそれを無準備で、突然に投げ棄てることのできるだろうか？

フェラーのような人が、こうした自発的で組織化されていない苦勞に関わりをもつと考えられるのでしょうか？彼ほどの人なら、それは敗北、民衆の側の悲惨な敗北をもたらずと知らない訳はありません。それでもし彼のような経験豊かな企業家(entrepreneur)が参加するならそれは完全に組織化され

た事業になるだろうとはありそうなことです。例え他のすべての証拠が揃はなくても、この要素だけでもフェラーは免罪です。でも他にも確信できる事柄がある。

暴動の当日、つまり七月十二日、フェラーはその教師達と合理的教育連盟の会員に会議を呼びかけていた。それはその年の秋季事業として、エリゼ・ルクリュの立派な本々人間と大地(L'Homme et la Terre)及びピーター・クロボトキンのフランス大革命史の出版を特に合議するためでした。フェラーが蜂起を知りながら、またそれに味方しながら、生命が危険にさらされているその当日、バルセロナに友人や同僚を、冷静に参集せしめたのは、ありそうなことで、また賞賛に値します。全く、犯罪的で悪党の心根をもったジェスイット派だけが殺人の謀議をやればよろしい。

フランススコ・フェラーはライフワークを計画していました。もし彼がその暴動に加担していたら、破滅と不幸の他、得るものは何もなく、すべてを失なっていたことでしょう。彼の仕事、希望、そして彼の本質は、別の目標にむけられていたのです。

カトリック教会の狂気じみた尽力、嘘、虚偽、中傷は徒勞でした。教会は過去の汚い犯罪を繰返して、人間の良心を眼覚めさせ、有罪を宣告されたのです。

フランススコ・フェラーは子供に、血も凍る観念、例をあげると―神を嫌悪するよう教えたとして起訴されました。恐ろしや！フランススコ・フェラーは神の存在を信じない。どうやって、存在しないものを嫌うよう子供に教えるのだろうか？彼は子供達を戸外に連れだし、落陽の素晴らしさ、星の輝く天上のきらびやかさ、山嶽や海洋の畏怖をもたらし驚異を教えたというのがありそうなことです。そして子供達に、その簡潔な直接法で、成長と発展とすべての生命の相關関係を説明したのではないのでしょうか？そうすることで、彼はカトリック教会が、子供の心に毒草を根付かせるのを永遠に不可

能にしたのです。

最後に、しかし少くはなく、フェラーは反軍思想を鼓吹して、軍隊を傷つけたと告発された、本当だろうか。彼はトルストイと同じく、戦争は合法化された虐殺で、憎悪と敵意を伝播させ、諸国民の心を喰ひ荒らし、狂気へ駆りたてると信じていたのに違いありません。

ところで、近代教育理念について彼の言葉を聞いてみよう。

「私は読者のすべてが、この理念に注意を向けるよう希望する。教育の全価値は、子供の肉体的、知的、道徳的意志を尊重することにかかっている。科学においては事実によるしか証明のしようがないように、すべてのドグマ（教条）を排除して、子供に子供自身の努力の方向を委せ、教育の努力を副次的にとめるのであれば、真の教育はあり得ない。ところで、この目的を変更する程安易なこととはなく、それを尊重すること程、むつかしいものはない。教育は常に義務を負わせ、暴力的で強制的である。真の教育者とは、子供を自分の（教師の）固有の理念から、また固有の気まぐれから最もよく守り得る人であって、子供自身の活力に最もよく訴え得る人である。

私達は、未来の教育が全く自発性に依るのを確信している。確かに、私達は未だそれを実現していない。しかし生命現象についての、広い理解に向けられた方法の発展と、完成にむけすべてが進むという事実によって、それは束縛を克服することであるが、そのすべては、科学によって子供達を救出するとの私達の希望が、正しいのを明らかにしている。

私達は恐れることなく言おう。私達が希望するのは、休みなく発展する能力をもつ人、自己の環境を、中止することなく破壊し再生させ、自己もまた改善する能力のある人だ。その人びとの知的自立は、彼等の最大の力となり、何ものにも依存しないだろうし、常に最良のものを受入れ、新理念的勝

利において幸福であり、一つの人生において、多様な生きようと熱望するのだ。社会はさような人を恐怖する。それ故、私達は、教育がそうしたものを与えるのにいつも欠けていると思つてはならない。

私達は、最大の関心を払つて、子供を研究する科学者の労作に従おう。さすれば、個人の十全な解放の方向において、私達が創設を希望する教育に宛て、彼等の実験を適用する手段を熱心に求める筈である。しかし、どのように私達の目的は達せられるだろうか？それは、新しい学校の設置を援助する仕事に私達が打ち込むことで達成されよう。そしてこの自由精神により可能な限り規制されるなら、私達の予想するものが、未来の教育の全事業を支配するのではないだろうか？

試みは実施され、現在、優れた成果をすでにもたらしている。現状での学校が答えているすべてのもの、強制の組織、子供を自然と人生からへだてる人工的な環境、子供に出来合いの思想を植えつけるのに利用される知的道徳的訓育、自然な傾向を奪ひ無化する信念、等を破壊することができる。私達自身を欺かずに、子供にふさわしい環境、子供の好むすべてのものと交歓できる自然の環境、その中でこそ人生の印象が、退屈な本の勉強にとつて代る環境を回復することができるのだ。それだけでなく、私達は子供を解放する大きな役割を果たしと言えよう。

さような状況の中で、私達は既に自由に科学的資料と労力を、最も効果的に適用できよう。私は私達の希望のすべてが、かように達成できなかったのは承知している。知識不足によって、好ましくない方法を用いなければならなかったのもしばしばであった。しかし私達を支える確実なものがあった。言わば、私達は目的に完全に到達できなかったとしても、私達の未だに不完全な事業が、現状で、学校がやっていること以上をしたに違いないのだ。私は何も知らない子供の自由な自発性の

方が、現在の教育に付された子供の世間知や知的欠陥よりも好ましい」

(一九〇九年一〇月〈大地〉誌に掲載―原註)

例えフェラーが実際に反乱を組織したとか、バリケードで戦ったとか、百個の爆弾を投げたとしても、カトリック教会と専制政府にとつては、彼が訓育と強制に反対する程には、危険ではなかったのです。訓育と強制―それこそこの世の諸悪の背景をなすものではないでしょうか？隷属、服従、貧困、すべての不幸、すべての社会的不公平は、訓育と強制から結果しているのです。全くフェラーは危険だ。だから一九〇九年一〇月一三日、彼はモンジュイッチ刑務所の溝の中で死なねばならなかった。だが彼の死が無駄だったとは誰が言うのでしょうか？世界的憤激の高まりを見てみよう。イタリアでは、フランス・フェラー通りが命名され、ベルギーでは記念像設置の動きがある。フランスは著名人が、この殉難者の遺産を回復しようと評びかけ、英国は伝記を発刊しようとしているのです。こうしてすべての国が、フランス・フェラーの偉大な事業を普及しようと団結している。進歩的理念にはいつも遅ればせな米国で、フランス・フェラー協会が生まれ、その目的をフェラーの生涯の伝記発刊と全国にわたる近代学校の創設にしている。国際的な革命の波に直面して、フェラーの死が無駄だつと誰が言えるでしょうか。

モンジュイッチでの死は劇的で、どれほど人間の魂を打ったことでしょう。誇らかに毅然として、心眼を光に向けたフランス・フェラーは、嘘つきの牧師が勇気を与えて呉れたり、一個の幻影が自分を棄て去ると喚きはしません。彼の意識は、執行人達が死に行く時代を代表し、自分こそ生きた真実を表象するものだとして、最後の英雄的な一瞬を支えたのである。

死に行く時代と生きた真実、
生者が死者を葬る。

*一九〇九年七月バルセロナで市民が蜂起した。その背景はアルフォンソVIII世治下でスペインの海外出兵の失敗。キューバー、フィリッピン、プエルトリコ等植民地の喪失による不満と国内ではカトリック教会の横暴に対する抵抗であった。教会は資本家階級と結び宗教・道德の面で都市労働者の搾取に手を貸した。この蜂起は一週間つづき、〈悲劇の週日〉(Semana Trágica)と呼ばれる。市民は召集中の兵士を乗せた列車をレールに坐りこんで阻止したり、教会を襲い財物を奪い、墓をあばいた。これは神の權威が虚偽なのを示すためだったが、司祭や尼僧の身体に危害は加えていない。

〈この蜂起は驚くべきことですね〉とアナキスト・アンセルモ・ローレンゾが書いている。〈社会革命がバルセロナで勃発した。しかも民衆によつて始められたのです。引金を引いた者はいない。誰も指導しない。リベラルもカタロニアのナシヨナリスト、共和派、社会主義者、アナキスト等によつて指導されたのではないのです。〉

一五〇名以上の男女が殺され、反教会・教育者であったフェラーが逮捕された。バルセロナの蜂起の道德的責任者とみなされたのである。彼は死にあたって叫んだ。

「諸君！よく狙つて呉れ給え、諸君に責任はない。私は無実だ。近代学校万才！」

「Viva L'Escuela Moderna」

*〈蜂の巣〉学園は「フォールの個人的財政負担により第一次大戦まで維持された。フォールはフランスの教育分野の革新者として記憶されている。